

学校支援の見える化

ー 支援体制のシステム化 ー

学 籍 番 号 239205

氏 名 尾崎 真義

主指導教員 瀧野 揚三

副指導教員 四辻 伸吾

1. 背景

昨今、社会環境が複雑化・多様化する中で、学校を取り巻く教育課題はいじめや不登校、貧困、学力向上等山積し、それに伴い多様な援助ニーズをもつ生徒たちが入学してくる。令和4年12月に改訂された生徒指導提要（文部科学省，2022）の中では『特に、今般の改訂では、課題予防・早期対応といった課題対応の側面のみならず、児童生徒の発達を支えるような生徒指導の側面に着目し、その指導の在り方や考え方について説明を加えています。子供たちの多様化が進み、様々な困難や課題を抱える児童生徒が増える中、学校教育には、子供の発達や教育的ニーズを踏まえつつ、一人一人の可能性を最大限伸ばしていく教育が求められています。』と記されており、生徒一人ひとりにあった支援だけでなく、未然防止や早期発見に努めていかなければならない。また、指導にあたるなかで、担任による指導・支援に偏ることなく、各分掌、委員会、学年はもちろん、スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラーや、各地域の福祉資源を活用し、適切な支援へと繋げていき、生徒の安全・安心を守らなければならない。

本研究は、勤務校で行った基本学校実習、発展課題実習を通じて行った、実態調査とそれを基にした支援システムの構築である。

2. 研究と実習

システムを構築する上で注目したのが「中学校訪問」と「年度当初の欠席日数」である。まず、実習校では、4月に2回以上、5月に3回以上の欠席があった生徒の半数以上の生徒に高い援助ニーズがみられた。このことから、4月と5月の欠席日数に注目し、一定以上の欠席があった生徒について、支援に繋げるシステムを構築する。

次に、中学校訪問について、実習校は入学者選抜後、当該学年団を中心に合格した生徒の中学校での様子やクラス編成時の注意等を中学校当該学年教員に聞き取りを行っている。この取り組みを利用して、共通の支援シートを作成し、データ化することで、統一した基準で学校職員間において把握や共有を行い、生徒の状況を短時間で確認できるシステムができるのではないかと考えた。

3. 結果と考察

4月に2回以上、5月に3回以上の欠席をした生徒を対象とした調査を行った結果、28名の生徒が対象となり、うち、16名（57.14%）の生徒に「不登校、長期欠席、学力不振

問題行動」などの高い援助ニーズが見られた。

また、生徒たちが示す援助ニーズは中学校訪問時の所見の内容から支援に繋がれることが多いことが判明した。

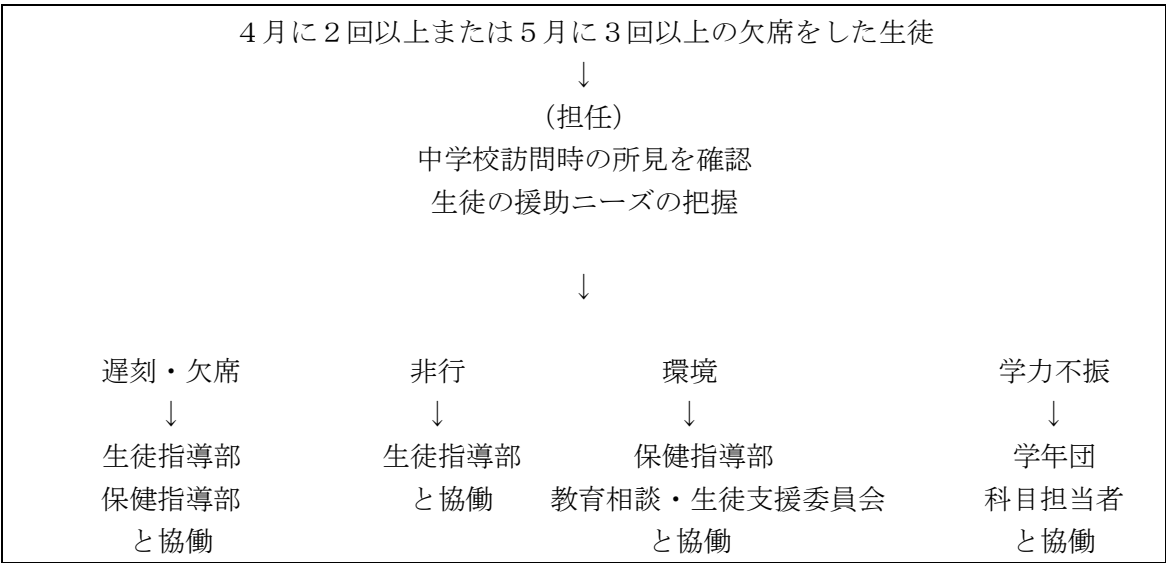
これらの結果から、年度当初の欠席日数と中学校訪問の所見を用いることで、援助ニーズの早期発見・未然防止に繋がれると考える。

4. 学校支援の見える化に向けて

本研究では、学校支援の見える化に向けて、中学校訪問の活用と1年生年度当初の欠席日数に焦点を当て、生徒の援助ニーズの把握を行い、支援を行ってきた。その結果、次のような提案を行いたい。

【4月に2回以上、5月に3回以上の欠席をした生徒に対し、中学校訪問の所見を活用しながら支援に繋げる】

今回の研究で4月に2回以上または5月に3回以上の欠席をした生徒の57.14%と半数以上が高い援助ニーズを示していた。また、高い援助ニーズを示した生徒のほとんどが中学校訪問の所見の中に援助ニーズが示されていた。このことから、4月に2回以上または5月に3回以上の欠席をした生徒について、中学校訪問の所見の確認を行う。確認した結果を各分掌、教育相談・生徒支援委員会へ共有し、援助ニーズの早期発見に繋げていく。ここで重要なことが、中学校訪問の所見を確認するのが担任のみにならないことである。例えば、援助ニーズが問題行動に繋がる生徒の場合生徒指導部と連携を組み、遅刻指導や生活指導時、高い援助ニーズを理解した上で行う。精神的不安や欠席の不安の多い生徒は崩れやすく、欠席が続いてしまい、連絡が取れなくなると支援に繋げることもできなくなってしまうため、養護教諭、保健主事、教育相談主担など多くの教員に繋げ、援助ニーズの早期発見に繋げることが重要である。



4月に2回以上または5月に3回以上の欠席をした生徒への対応